様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３４３１９
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３４０９

研究課題名（和文）中央アジア・オアシス地帯における都市の成立と展開：ザラフシャン川流域を中心として

研究課題名（英文）A Study on the Developmental processes of Cities in Oases of Central Asia: Focusing on the Zeravshan Valley

研究代表者
宇佐美　智之（USAMI, Tomoyuki）

京都芸術大学・芸術学部・講師

研究者番号：６０８３８１９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，中央アジア・ザラフシャン川流域を対象として，前イスラム期における都市の成立・変容について考察することを目的としたものである。
Covid-19の影響により当初の研究計画には大幅な変更を加えることとなったが，限定的ながらも，①有力遺跡の発掘と構造・立地分析，②ザラフシャン川流域における考古遺跡の踏査・体系的集成，③地理環境・古代交通網の調査とGIS空間解析・復元を進めた。結果，初期中世期を中心とした個性的な都市空間の形成や地域社会の変化があったことなどを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究対象地であるザラフシャン川流域，特にその中流域にあたるサマルカンドは，シルクロードの重要な地理的位置を占めると同時に有数の穀倉地帯をなし，歴史的に有力な交流・交易拠点をなしたことが知られる。しかし前イスラム期における都市形成のあり方については資料が乏しく，不明な点が非常に多いのが実状である。本研究では，Covid-19の影響による研究計画の大幅な変更を伴いつつも，有力遺跡の発掘や地域全域の遺跡情報集成などを可能な限り進めた。この試みを通して，初期中世期を中心とする都市空間の形成や地域社会の変化を捉え，従来の議論を大きく深めうる知見と見通しを得た。

研究成果の概要（英文）：With the aim of better understanding the formation of cities and local societies in the Zeravshan valley, Central Asia, during the pre-Islamic period, this study have cariied out the following: 1) exacavations on two archaeological sites and intra-site analysis, 2) field survey on settlement sites and construction of GIS database, and 3) geographical survey on this region and GIS spatial analysis. As a result, we have revealed that the establishment and developmental process of cities and transformation of settlement patterns during the early medieval in this region.

研究分野：考古学

キーワード：都市遺跡　中央アジア　サマルカンド　ザラフシャン川流域　オアシス　シルクロード　カフィル・カラ遺跡　ミングテパ遺跡

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

中央アジアはその大部分を砂漠とステップが占める乾燥地域であるが，主要河川に沿ってオアシスが存在する。アムダリヤ，シルダリヤという大河の中央を西流するザラフシャン川の流域，特にその中流域（ウズベキスタン・サマルカンドを中心として，タジキスタンの一部地域を含む）は，東西と南北の幹線路が交錯する要衝かつ，有数の穀倉地帯に発展したオアシス地域である。この地はソグド（ソグディアナ）という古名をもち，前イスラム期にはここを本拠としたソグド人が国際的に大きな役割を果たしたことがよく知られる。

ザラフシャン川流域では，紀元前一千年紀前半に本格的な灌漑技術にもとづく農耕文化が成立し，大規模な都市が発達・変容を遂げた。中央アジア全体でも非常に大規模な都市遺跡として知られるアフラシアブ遺跡（サマルカンド）では，半世紀以上にわたり発掘調査が進められており，その歴史的変遷や構造について多くの知見が蓄積されてきている。それによれば，紀元前 6 世紀頃までには大規模な城壁や運河を備えた大型都市が成立して，以後西暦 13 世紀頃まで長期にわたりソグドの中心をなしたものとみられる。

一方従来においては，そのような大規模な都市遺跡の構造や盛衰が周辺遺跡や地域全体の動向と切り離して議論されるにとどまっていたといえる。それは資料的制約が大きいことによっていたが，近年では考古学調査が著しく進展しつつあり，その成果をふまえると「点」として大規模都市遺跡を理解するだけでなく，「面」として域内の遺跡動態を捉え都市や社会のあり方を議論する必要があると考えられる。

特に注意するべきは，規模の面では必ずしも大規模でないものの，特徴的な形態・構造や出土資料を伴う有力遺跡（例えばサマルカンド市近郊のカフィル・カラ遺跡，クルドールテパ遺跡など）の存在が域内で明確化してきていることである。近年調査が進んでいるカフィル・カラ遺跡について言及するならば，初期中世期を中心に盛行したことがわかっているが，大量の封泥をはじめ卓越した資料が多数確認されている。そしてそのような有望な遺跡が域内で他にも見つかっている。オアシス地帯の都市の性格や歴史的変遷についてさらに理解を深めていく上では，「点」的な遺跡理解から，こうした有力遺跡の性質・役割や相互関係，あるいは「面」的な地域構造を探る視点が必要であるといえる。ただしこれまで，そのような問題に対する議論は必ずしも十分に深められていない。

なお，研究開始当初は Covid-19 による海外渡航・現地活動等の制限は全く想定されていなかったため，実際に上記のような問題意識にもとづき調査研究を遂行するには非常に難しいところがあった。また研究計画・方法においても，大幅な変更を加えた部分があることには注意されたい。

２．研究の目的

以上のような問題意識にもとづき，本研究ではザラフシャン川流域における遺跡動態や有力遺跡に関する調査研究を通して，前イスラム期のオアシス地帯における都市の性格や成立・展開過程について議論を深めることを当初目指した。具体的には，(A)当該地域の中心都市遺跡（アフラシアブ遺跡）とともに周辺の（衛星的位置を占める）諸遺跡の性格や動態を考古資料に即して検討すること，(B)それを通して域内のネットワークの有無や特質について考察すること，(C)ザラフシャン川流域全体あるいは周辺オアシス諸地域でも類似の地域構造のパターンが見出されるか否かを探ること，これら 3 点の検討を研究の柱とした。

３．研究の方法

上記目的をふまえ，研究開始当初においては，①有力遺跡（カフィル・カラ遺跡，ミングテパ遺跡）の発掘と構造・立地分析，②ザラフシャン川流域全域における考古遺跡の踏査・体系的集成，③地理環境・古代交通網の調査と GIS 空間解析・復元，というミクロ・マクロの調査研究を実施することを想定した。

ただし，①～③は現地での調査活動を基礎とするものであり，初年度（2019 年度）を除き Covid-19 による海外渡航・活動の制限を受けたため，いずれの取り組みにおいても本来期待した水準で調査研究を実施することは非常に困難であった。

このような状況下において，①については当初予定よりも調査期間や範囲をかなり限定しつつも，サマルカンド市近郊に位置するカフィル・カラ遺跡，ミングテパ遺跡を対象に，試掘調査を含む考古学調査ならびに遺跡構造・立地分析を可能な限り推進することとした。②，③については，現地踏査や現地機関での情報収集を断念したため計画・方法を大きく変更した部分があるが，高解像度衛星画像や米軍偵察衛星画像（主に CORONA 衛星画像。1960 年代の当該地域のデータを米国地質調査所より取得），地図類を入手・利用し，対象地全域の遺跡情報（主にテパの平面形態や規模，囲郭施設の有無など）や地理環境情報（前近代の河川流路や用水網，道路網など）を国内にいながら可能な限り広く集成することに努めた。なお，これらの作業で得られた情報については今後現地で検証・確認を進める必要がある。

４．研究成果

本研究では既述の通りミクロ・マクロの 3 つの調査研究を軸として進める構想をもっていたが，計画・方法において大幅な変更を余儀なくされた経緯がある。しかしそれでも上記①の取り組みでは，学史的に新しい知見を得られており，ここではその成果を中心に記述する。最後に，上記②，③の作業を含めた本研究の総括ならびに今後の見通しを簡潔に述べる。

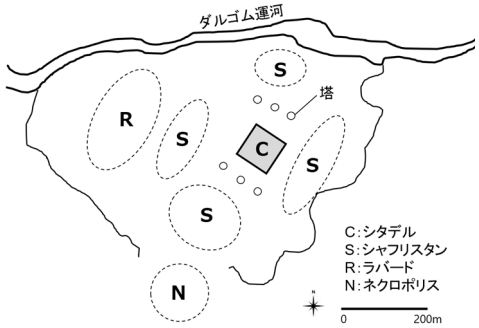

図１　カフィル・カラ遺跡の空間構成

(1) 有力遺跡の調査と構造・立地分析（上記①）

本研究では，2019 年度よりカフィル・カラ遺跡，さらに 2021 年度よりミングテパ遺跡を対象として試掘調査を含む考古学調査ならびに遺跡構造・立地分析を進めた。なお，海外渡航が強く制限された期間においては，現地研究機関・研究者を中心に調査を進め，オンラインで進捗状況や資料・データの詳細を確認するという方法をとった。

① カフィル・カラ遺跡の調査と構造・立地分析

カフィル・カラ遺跡は，サマルカンド市中心部から南西約 12㎞ の地点に所在する。この遺跡は，約 75×75m の正方形状の高い城砦（シタデル地区）を中心に，シャフリスタン地区（城壁内の市街地），ラバード地区（城壁外側のエリア）などで構成され，現存の遺跡面積は約 16ha である（図 1）。ただし本来の遺跡の範囲はより大規模であった可能性がある。

2018 年度までにシタデル地区（城砦）では全面的な発掘調査が行われ，初期中世期を中心にソグドの都市文化に関する重要な発見が相次いでなされた。それとともに，異例といえる多量の封泥の出土など特殊な機能を推測させる要素が多く，考古資料の質・量の豊富さとともに地域構造を把握する目的において鍵を握る遺跡のひとつと位置づけられた。一方，従来調査が行われてきたシタデル地区に対し，シャフリスタン地区やラバード地区の調査は限定的で，遺跡全体としては不明な点も多かった。このことから本研究ではシャフリスタン地区を中心に試掘調査を実施し，従来の知見と合わせて遺跡の性質・役割に関する考察を行った。

シャフリスタン地区の調査結果としては，初期中世期を中心に一部構造が把握され，大型施設跡を含む配置の様相が一定程度推定できるようになった。出土遺物については必ずしも多くないが，初期中世期を中心とする土器とともに壁画断片が見つかっている。壁画の内容は不明であるが，有力層の空間とみてよいであろう。従来想像の域を出なかったシャフリスタン地区の性質に関して断片的ながらも具体的な情報を得たことは重要である。また，シタデル地区（城砦）とおよそ同時期とみられる焼土・炭層も確認された。シタデル地区ではその全面を焼土・炭層が覆ったことが判明しているが，その年代は，貨幣などの出土遺物からアラブ勢力の侵攻時期と重なる西暦 8 世紀初め頃とみられる。シタデル地区のみならずシャフリスタン地区に及ぶほどの非常に大規模な火災があった可能性が強まり，大規模な戦闘行為が生じたことが想定される。このことは，後述するようなカフィル・カラ遺跡の軍事的性格の強さとも対応的であるといえる。

この調査結果を含め，カフィル・カラ遺跡の構造・立地分析で得られた成果は以下の通りである。現在までの調査研究を通して，シタデル地区（城砦）では西暦 7 世紀末・8 世紀初頭頃の空間構造が良好に復元され，よく整備され荘厳された独特な空間をなしていたことが判明している。また，遺跡規模としては中小規模のものであるが，シタデル・シャフリスタンを中心とした城壁をもつ都市空間と評価できる。防御性がすぐれて高いことも重要な特徴である。さらにその立地は，域内の遺跡集中地帯のひとつにあるとともに，南のカシュカダリヤ地域につながる山越えのルートに近接する。こうした空間構造や戦略性の高い立地，また各種の出土資料等を総合的に判断した場合，この遺跡は南北間の交通・運輸や政治・軍防等に対する中小型拠点都市と位置づけることができる。なお，カフィル・カラ遺跡については中世アラビア語史料にある「レヴタートにあったサマルカンド王たちの離宮」に比定する見解が従来有力であるが，上に述べた理解はこれと必ずしも矛盾するものではない。

② ミングテパ遺跡の調査と構造・立地分析

第二の研究対象としたミングテパ遺跡は，サマルカンド市中心部から北東約 20㎞ の地点に所在する。この遺跡については，アラビア語や漢文史料に記録されるカブダン（魏書や西域などで伽不單國，都伽不單城または劫布呾那と表記）または曹国に比定する意見が示されており，有望な遺跡であることが予想されてきたが，これまで十分な調査は行われておらず，その実態には不明な点が非常に多い。加えて，ミングテパ遺跡が所在するジョンボイ地区（サマルカンド北側の地域）では考古学調査の進展がそもそも不足し，資料状況が乏しかった。この遺跡に関する調査研究は，本課題においてカフィル・カラ遺跡と並び重要な位置を占めるものである。

ミングテパ遺跡は約 35ha の面積をもつ遺跡であるが，北側に特徴的な 2 重の城壁が設置されていることが判明した（図 1）。遺跡南側に位置するシタデル地区は周辺平坦地と約 12m の比高さをとる，1 辺 55～60m 程の不定形の高まりである。北・東・西の 3 方位をシャフリスタン地区に囲まれ，南端にも城壁が築かれている。城壁外側（特に東西の範囲）にラバード地区が広がる

ものとみられるが，詳細については不明である。

調査についてはシタデル地区から約 100m 西の地点にあたるシャフリスタン地区・第 3 トレンチ（図 2）を中心に実施した。結果として，「アーチ型通路」といった特徴的な施設を含む初期中世期頃の遺構配置が良好に把握された（図 3）。また壁に被熱した状況も確認され，上述したカフィル・カラ遺跡と同様の火災痕跡かは今後検討するべき事項である。遺跡の中心的な時期についてであるが，資料の整理を順次進めている段階ではあるが，出土土器や貨幣からみて初期中世期が盛行期に相当すると推定できたことは大きな成果であったといえる。

出土資料は多岐にわたるが，大量の土器片や動物骨に加え貨幣や小像といった資料が見つかっている。土器については整理中であるが，大半が西暦 6～8 世紀と推定できるもので，ソグドおよびその隣国ウステュルシャナの特徴がうかがえる。貨幣については 2 点が出土したが，うち 1 点は保存状態が良好であり，調査協力者のベグマトフ・アリシェル氏（ニューヨーク大学研究員）によれば，ソグド文字の銘文が r'mcytk βγy〔ラームツェート神〕と読めるという。また先行研究や類似例をふまえ西暦 7 世紀の終わりから 8 世紀初めのものである可能性が想定されている。なお調査地区周辺で 1 点の貨幣が採集されたが，それについては 7 世紀前半のシシピル王の時期であることが判明した。

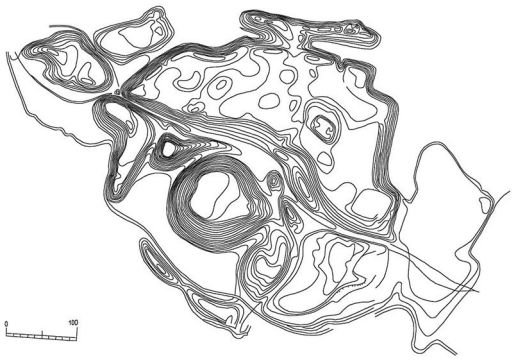

図 2　ミングテパ遺跡平面図

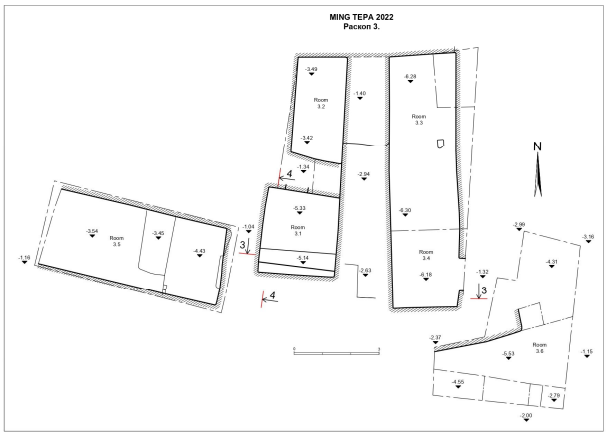

図 3　調査区域（シャフリスタン地区・第 3 トレンチ）

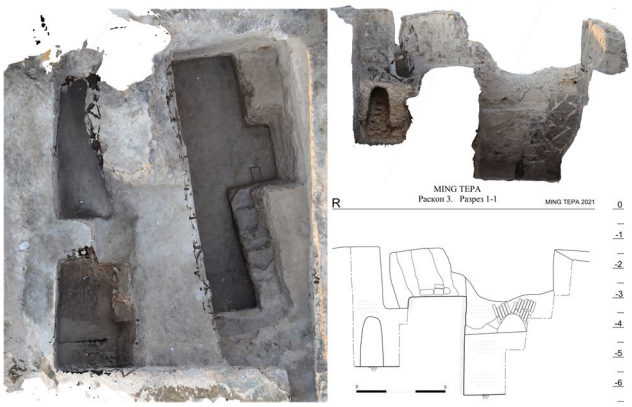

図 4　第 3 トレンチの完掘状況

以上の諸点をふまえ，ミングテパ遺跡の構造・立地分析の結果は次のように整理できる。約 35ha の面積をもつ比較的規模の大きな遺跡であることが従来知られていたが，城壁の位置や規模，中枢機能をもつシタデルの規模・形態，またシタデル・シャフリスタン・ラバード各地区の整備された空間構成，そして出土資料を総合的にみて，強固な城壁を伴う都市空間であった可能性が非常に強まった。さらにその立地は，サマルカンド中心部（アフラシアブ遺跡）から北に向かう幹線に近接し，サマルカンドオアシスの城壁とみられるカンピルデュヴァルが確認されている地点に近いことも大変示唆的である。今後の調査に委ねられる部分は少なくないが，カフィル・カラ遺跡と似た，南北間の交通・運輸や軍防に関わる個性的な拠点都市と位置づけることができるものと考えている。なおそれは，上述した外国史料にみるカブダンまたは曹国の中心地に比定できるという見解を支持することになるであろう。

(2) 本研究の総括と成果公開

以上に示したように，「有力遺跡の調査と構造・立地分析」（上記①）では，カフィル・カラ遺跡，ミングテパ遺跡を主対象として検討を進めた。特にミングテパ遺跡についてはこれまでの調査研究の蓄積がきわめて少なく，学史的に新しい情報を多く含んでいる点は特筆できる。そして，両遺跡の検討を通して，初期中世期を中心に個性的な都市空間が成立したであろうこと，また政治・軍事・交通における拠点機能を形成した可能性が強いことなどを確認・把握した。考古資料にもとづく詳細な分析はこれからの課題であるが，この成果にもとづき，ソグド最大の中心地であるアフラシアブ遺跡に対し，衛星的位置をとりつつ交通の要所に中小型の拠点都市が発達し

て，それらが一体化した都市社会（ネットワーク）を形作った可能性が強いものと考える。現状では想像の域を出ないものであるが，中心都市―衛星都市といった地域モデルを想定することもできるかもしれない。いずれにせよ，カフィル・カラ遺跡，ミングテパ遺跡に関する研究結果は，オアシス地帯の都市や当該地域社会の変化に関する従来の理解を大きく深めうるものと評価したい。

この検討に加え，本研究では「ザラフシャン川流域全域における考古遺跡の踏査・体系的集成」（上記②），「地理環境・古代交通網の調査と GIS 空間解析・復元」（上記③）を実施している。既述のように，初年度を除き現地踏査・資料収集を断念したため今後の調査研究活動に委ねられるところも多いが，以下のような取り組みを進めた。

入手可能な地図類や高分解能衛星画像，ならびに 1960 年代の偵察衛星画像（CORONA）などを GIS データベースに格納した上，ジオリファレンスを実施し，遺跡や地理環境について検討を行った。これにより，近代の土地開発に伴い破壊・消失した考古遺跡（テパ）を特定するとともに，ザラフシャン川中流域を中心に広域的に遺跡位置（候補地）を把握し，分布図を作成している。各種衛星画像で捉えられるものについては，テパの平面形態や面積，囲郭施設の有無・形態の情報を整理し，データベース化した。また，地理環境情報として，前近代の河川流路や用水網，道路網などについても年代の異なる衛星画像・地図類を用いて部分的に検討を加えた。さらに，衛星画像解析を通して近現代の土地被覆や植生の変遷についても検討し，過去の地理環境や交通路推定の材料とした。このような予備的な情報収集・検討作業を重ね，今後の現地での調査研究活動の基礎とすることに努めた。

本研究では，当初計画を十分に遂行することは現実的に困難であった一方，結果的には有力遺跡の調査研究を中心として新たな知見と良好な見通しを得ることができたといえる。さらにそこからザラフシャン川中流域（ソグド）の都市社会の特質について考察を加えており，一定の学術的意義が得られたものと評価する。カフィル・カラ遺跡，ミングテパ遺跡の調査結果については既に国内・海外の学会において複数の報告を実施しているが，今後報告書の刊行に向けて作業を進めるとともに，学術誌において総括的な研究成果を提示する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 宇佐美智之	４．巻 15
２．論文標題 中央アジア・ザラフシャン川流域における1960年代以降の遺跡環境の変化：CORONA衛星写真とGoogle Earthの判読から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 歴史都市防災論文集	６．最初と最後の頁 217-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 ベグマトフ・アリシェル，宇佐美智之，ラフマノフ・ホゥスニディン，サンディボエフ・アリシェル，ボゴモロフ・ゲンナディー，ミルザアフメドフ・シロジ	４．巻 -
２．論文標題 中央アジア・オアシス地帯における都市の成立と展開：ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査（2021 年度）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 第29回西アジア発掘調査報告会報告集：令和3年度考古学が語る古代オリエント	６．最初と最後の頁 18-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宇佐美智之	４．巻 14
２．論文標題 中央アジア・ザラフシャン川流域における土地利用変化と考古遺跡：Landsat衛星データを用いた分析から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 歴史都市防災論文集	６．最初と最後の頁 139-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00013616	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Alisher BEGMATOV, Amriddin BERDIMURODOV, Gennadiy BoGOMOLOV, MURAKAMI Tomomi, TERAMURA Hirofumi, UNO Takao, USAMI Tomoyuki	４．巻 119
２．論文標題 New Discoveries from Kafir-kala: Coins, Sealings, and Wooden Carvings	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ACTA ASIATICA	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宇佐美智之	4．巻 730
2．論文標題 ソグドの都市：カフィル・カラ遺跡の調査から	5．発行年 2019年
3．雑誌名 月刊考古学ジャーナル	6．最初と最後の頁 36-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Rahmonov, H., Usami, T., Begmatov, A., Sandiboev, A., Mirzaakhmedov S.	4．巻 14
2．論文標題 On the Archaeological Research Conducted at Mingtepa in 2021 (in Uzbek)	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Archaeological research in Uzbekistan	6．最初と最後の頁 110-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 ベグマトフ・アリシェル，宇佐美智之，ラフマノフ・ホゥスニディン，デクルイネール・デルフィーヌ，ミルザアフメドフ・シロジ	4．巻 -
2．論文標題 中央アジア・オアシス地帯における都市の成立・展開過程の研究 ：ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査（2022 年度）	5．発行年 2023年
3．雑誌名 第 30 回西アジア発掘調査報告会報告集：令和 4 年度考古学が語る古代オリエント	6．最初と最後の頁 124-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 宇佐美智之
2．発表標題 中央アジア・ザラフシャン川流域における1960年代以降の遺跡環境の変化：CORONA衛星写真とGoogle Earthの判読から
3．学会等名 第15回歴史都市防災シンポジウム
4．発表年 2021年

１．発表者名 ベグマトフ・アリシェル，宇佐美智之，ラフマノフ・ホゥスニディン，サンディボエフ・アリシェル，ボゴモロフ・ゲンナディー，ミルザアフメドフ・シロジ
２．発表標題 中央アジア・オアシス地帯における都市の成立と展開：ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査（2021 年度）
３．学会等名 第29回西アジア発掘調査報告会
４．発表年 2022年

１．発表者名 宇佐美智之
２．発表標題 中央アジア・ザラフシャン川流域における土地利用変化と考古遺跡：Landsat衛星データを用いた分析から
３．学会等名 第14回歴史都市防災シンポジウム
４．発表年 2020年

１．発表者名 宇佐美智之
２．発表標題 衛星画像を用いた中央アジア・オアシス地域における土地開発・利用の変遷と遺跡立地環境の検討：ウズベキスタン・サマルカンドを例として
３．学会等名 第29回地理情報システム学会研究発表大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 村上智見、寺村裕史、宇野隆夫、宇佐美智之、ベグマトフ アリシェル、ベルディムロドフ アムリディン、ボゴモロフ ゲンナディー、サンディボエフ　アリシェル
２．発表標題 シタデルを覆う火災層の調査：ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査（2019年）
３．学会等名 西アジア発掘調査報告会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Alisher Begmatov, Tomoyuki Usami, Husniddin Rahmonov
２．発表標題 Excavations at Mingtepa, a Sogdian Town near Samarkand
３．学会等名 The 88th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, Oregon Convention Center, Portland（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 ベグマトフ・アリシェル，宇佐美智之，ラフマノフ・ホゥスニディン，デクルイネール・デルフィーヌ，ミルザアフメドフ・シロジ
２．発表標題 中央アジア・オアシス地帯における都市の成立・展開過程の研究　：ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査（2022年度）
３．学会等名 第30回西アジア発掘調査報告会
４．発表年 2023年

１．発表者名 宇佐美智之
２．発表標題 中央アジア・ウズベキスタンのシルクロード都市遺跡と芸術文化
３．学会等名 芸術研究の世界（文明哲学研究所オンラインセミナー）（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関